＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

# 東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第111号　毎月発行

発行2021年（令和3年）8月16日　月曜日

2021年（令和3年）8月16日　月曜日

## 【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

**【砂越　豊】**

宮城県生まれ、67歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

# 「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産に登録

## 東北縄文研究活発化で東北イメージを一新できるか

### 「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産に登録

先月二十七日、ついに「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコの世界遺産に登録された。まことに喜ばしいことである。

アマチュアながらも、縄文文化を研究する筆者としてもまことに誇らしいし、登録された十七の縄文遺跡の半分程度は、ユネスコへの登録申請のずっと前に訪れていたのでなおさらである。

これで「縄文遺跡」、さらには「縄文文化」がより広く世界に知られる契機となることを祈っている。

しかし、この登録に至るまでには、多少の紆余曲折があったのも事実である。

### なぜ北海道・北東北？

端的にいえば、縄文遺跡は日本列島に広く分布しているのに、なぜ北海道と北東北の三県（青森、秋田、岩手）の遺跡だけが対象なのかという点だった。もっともな指摘だと筆者も感じ、この登録申請の行方を心配しながら見守っていた。

事前審査においての詳細な指摘は次のようなものであった。

「狩猟・採集・漁労を基盤とした定住生活に顕著な普遍的価値があることを申請事由に上げているが、それは縄文文化全体に言えることであり、北海道・北東北に限定されることではない。全国約九万箇所に縄文遺跡が分布するにもかかわらず、なぜこの四道県なのかと疑問が呈されたし、縄文遺跡を十七箇所に絞ったことについても、普遍的価値を十七遺跡で過不足なく説明できているのか、十七遺跡ありきで始まり、普遍的価値を後付けしている印象と指摘され、さらなる見直しを求められた。」

たしかに筆者も多少の違和感を抱いていた。

全国と言わないまでも、せめて北海道と東北六県に拡大して、「北海道・東北の縄文遺跡群」として欲しかったとの思いがいまもあるのも確かである。

### ここにも「西高東低」？

しかし、この「四道県」に限定した申請には別の積極的な意味合いも見いだせるのではないかとも思う。

少し回りくどいが説明する。

まず、筆者には、縄文遺跡発掘に関して、西日本側は活発であるが、東日本、特に東北と北海道はあまり活発とは言えないし、発掘予算等も格差があるだろうとにらんでいる。

縄文文化は東北や北海道から開始されたにもかかわらず、そうしたことが事実ならば大いに矛盾している。

「本家本元」の東北・北海道を最初に発掘せずに、それより後代の西日本の縄文遺跡を先に、かつ中心に発掘するなど考えられない。

唯一考え得る言い訳としては、西日本に多く見られる弥生遺跡の発掘のついでに、縄文遺跡が発見されるケースが多いのでそうなったということくらいであろうか。

ここにも、明治以来の「西高東低」が見て取れると思うのである。ほんとうにこんなことでいいのだろうか。

そうした流れが、この「北海道・東北の縄文遺跡群」の登録で変化するのではないか。

東北六県が足並みをそろえるまでにはさらに長い期間を要する。ならば、宮城・山形・福島の東北3県も包含した「北海道・東北の縄文遺跡群」を待つより、「四道県先行」の登録で、この地域の縄文遺跡にスポットライトをあてるのもいいのではないかとも考えるのである。

### 東北には埋もれたままの縄文遺跡がある

縄文遺跡発掘における「西高東低」について具体的な例を挙げないと抽象論であり、言いがかりだと言われそうなので、あえて門外漢である筆者の体験を記載させていただく。

筆者の郷里は宮城県の遠田郡涌谷町である。実はここに、少なくとも七千年前の縄文遺跡が存在し、国史跡にも指定されている。

それは「長根貝塚」というが、筆者は何度も訪問しているし、そこで歴史映像の撮影も行っている。

しかし、この遺跡は本格的な発掘はなされておらず、「試掘」が数回なされただけで、ほぼ放置状態である。それでもたくさんの遺物が出土している。

七千年前の縄文遺跡というのはどういう位置づけになるかといえば、かの有名な青森の三内丸山遺跡よりずっと古いのである。

三内丸山遺跡は約五千九百から四千二百年前までの遺跡であるから、始まりはそれより千年以上古いし、長根貝塚は二千三百年前まで使われたので、三内丸山遺跡の千五百年間よりも、四千七百年以上の長きに亘って使われている。

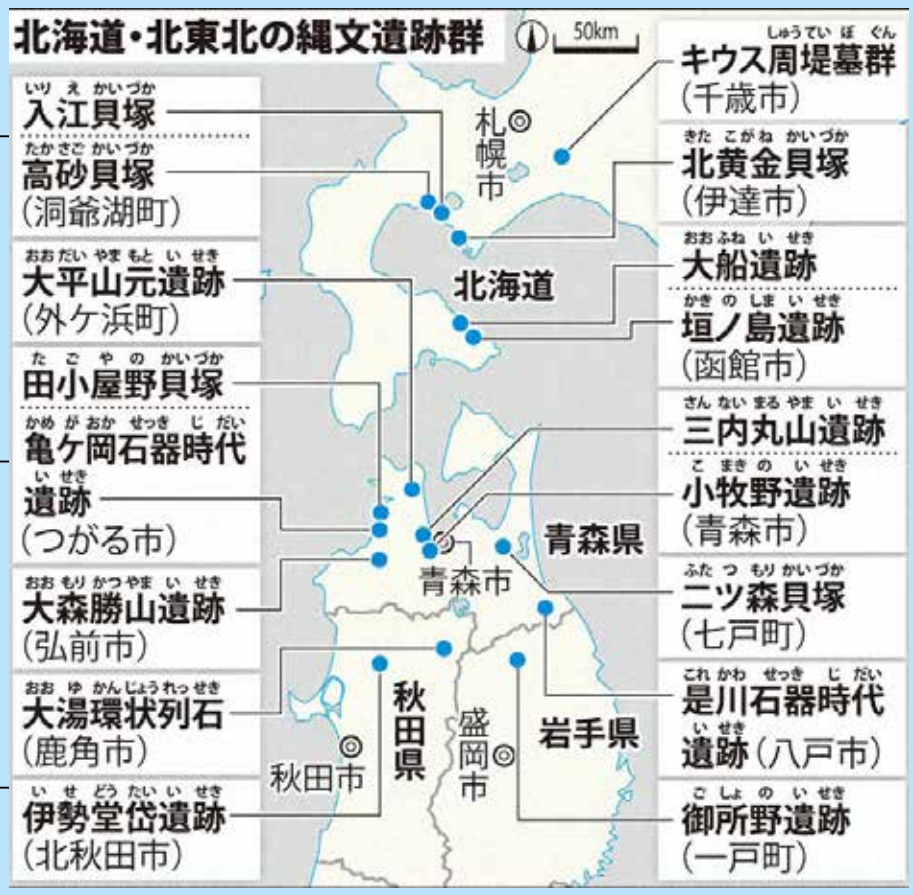
そのためこの貝塚は、温暖な縄文時代の「縄文海進」による海水の時代、それに続く汽水の時代、さらに淡水の時代という三つの異なる環境下でも使われていた貴重な縄文遺跡なのである。

今回ユネスコの登録から漏れた「南東北」にもこうした縄文遺跡はたくさん埋もれていると確信する。

本格的に発掘された暁には「縄文」のイメージが大きく変化する可能性さえある。

### 三万年前、北海道に現生人類が居住していた

「西高東低」は「南東北」のことだけではない。北海道にもある。




ユネスコ世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」ー毎日新聞

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

現生人類が存在していなかった先史時代の日本列島に最初に現生人類が流入したのは台湾―沖縄諸島―九州の南方からのみというのが通説である。

しかしこれにも疑問がある。その時期は今から四万年から三万年前のどこかと言われている。

他方、北海道にも、少なくとも三万年前に人類の痕跡が見つかっている。

しかも、今から四万年から三万年前の時代には、南方ルートは過酷な船旅が不可欠だったが、大陸から北海道へは、ほぼ「徒歩」で渡れたのである。その付近の海が凍結していたからである。とすれば、南方から北海道に北上したのか、それとも大陸から渡ってきたのかのいずれかである。

確たる証拠なしに、あまりにも南方ルートと決めつけるのは偏り過ぎである。今後、北海道への現生人類流入ルートの検証が待ち遠しい。

そうなれば、「西高東低」も大いに修正されるかもしれない。

## 日本考古学の変革期待

話題を日本考古学に拡大すると、考古学の関心は「邪馬台国」がどこにあったかに集中しているように感じる。その論争がいまも続いている。

往時には国内には文字文献がなく、唯一、中国の文献に「邪馬台国」らしき記述があって、それをもとに畿内説、九州説に二分しているが、その文献の真実性を分析するのが先ではないのか。

仄聞でしかない他国の文献記述を信じての論争など意味があるとは思えない。

また、最近ようやく修正したのだが、「縄文時代の家屋」であった「竪穴式住居」に関して、三十年の間違い期間を経て修正されたことがある。

これまでは、「竪穴式住居」の屋根は「茅葺」であったところ、「土屋根」に修正されたのである。

なぜこんなことになったか。それは考古学の専門家でないある建築関係者が大した根拠もなく登呂遺跡の住居を茅葺屋根にしたのを見習って、一挙に広まったというのが真相らしい。

そして三十年経って、その誤りをようやく修正したのだ。

誤りはとっくに気づいていたようだが、日本の考古学会はなかなか修正しようとしなかったようだ。

これらのことだけで日本の考古学会を評価してはならないのかもしれないが、たくさんの遺物が発掘され、かつ、環境考古学などの新分野も登場しているというのに、それに重点を移さずなかなか変われない学会の説をうのみにするのは危険のようだ。

## 先史時代イメージの革新と東北

「北海道・北東北の縄文遺跡群」のユネスコ世界遺産に登録ということでいろいろ述べてきたが、最後に言いたいのは、東北の縄文遺跡や縄文文化をさらに深く研究することにより、辺境東北、衰退だけしかない東北というイメージを打破して欲しいと願っている。

ぜひ今回の世界遺産登録をその契機にして欲しいと願っている。

中空土偶（北海道）

大平山元Ⅰ遺跡（青森）・・・列島最古の土器片

大船遺跡（北海道）

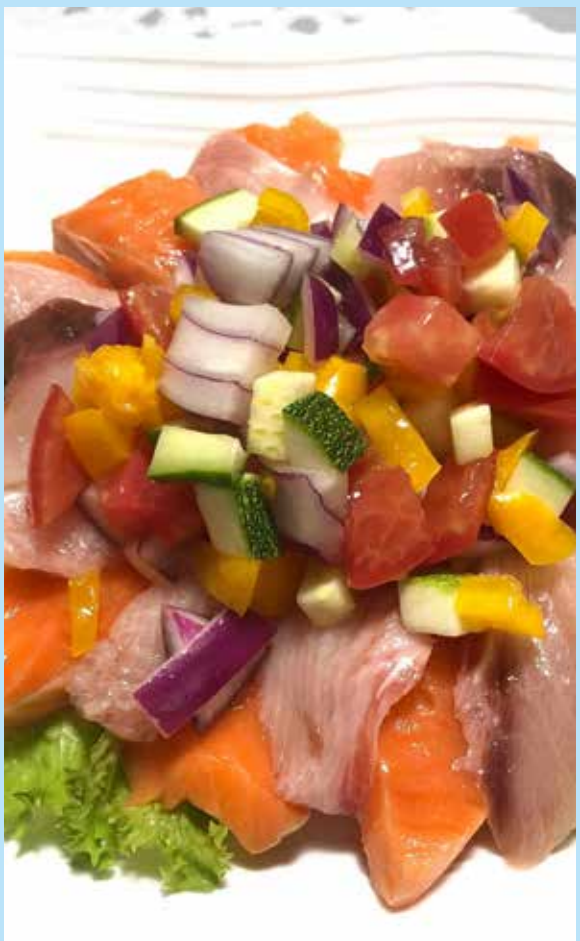
JR五能線木造駅舎（青森）・・・土偶

北黄金貝塚（北海道）

小牧野遺跡（青森）・・・環状列石

大湯環状列石（秋田）

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.



# 第84回

## 水産業再興のための料理レシピ紹介

## 《角野菜と刺身のマリネ　黒瀬のぶりとサーモン》

夏はさっぱりとした魚介と野菜がむいてますね。（松本談）

郷土料理愛好家
松本由美子氏

**―材料―**　<2 人分＞ トマト １個、黄パプリカ １／２個 、ズッキーニ 50g 、紫玉ねぎ 40g
＜調味料＞ オリーブ油　大 2、ワインビネガー ( 酢でもよい ) 大２ 、塩　小 1/2、刺身 ( 好みのもの ) 200g 、塩　少々、サラダ菜　適量

**―料理方法―** ①　野菜はそれぞれ 8㎝に角に切り、調味料とよく合わせて混ぜる。冷蔵庫に 30 分ほどおきます。 ②　刺身は、削ぎ切りにして塩をふり、ラップをかけて冷蔵庫に 30 分程おく。 ③　皿にサラダ菜 ( サニーでも ) を敷き、刺身を並べ、野菜のマリネをのせる。
＊野菜のマリネは冷蔵庫で３～４日保存可能なようです。鯛やホタテもおすすめです。また、ズッキーニはクセがなく食べやすい夏野菜ですね。(松本談)

三陸の会はほんといつになったら開催できるんでしょうか？待ちすぎて、待ちくたびれてしまいました。ほんとーに早くみなさんに会いたいです！そして美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！でも再開までは写真画像と家飲みで何とか耐えてください。再びお会いできる日を首を長ーくして待っております！

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

**写真で**

**お伝えする**

**東北の風景**

**写真撮影**

**尾崎匠**

**【バーチャル・岩手の８月】を楽しもう！**

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 東北に貢献できる仙台に

## 仙台市長選挙を振り返って

八月一日は仙台市長選挙の日だった。現職の郡和子氏と元衆議院議員で前回の仙台市長選挙でも立候補した加納みよ氏の二人が立候補し、郡和子氏が当選した。投票率は二九・〇二パーセントで、過去最低だった。現職の二期目で対立候補が一人、というパターンでは、過去も投票率が低く、藤井市政二期目となった一九九七年の市長選挙は三一・九七パーセント、奥山市政二期目となった二〇一三年の市長選挙は三〇・一一パーセントと、今回ほどではないものの、やはり投票率は低かった。新人四人が立候補した前回二〇一七年の選挙が四四・五二パーセントだったので、そこから一五ポイント以上低下したことになる。

得票数を見てみると、郡氏が二〇九三一〇票、加納氏が三八五六七票だった。郡氏は投票総数二五八三七五票のうちの八一・〇パーセント、加納氏は一四・九パーセントの票を得たことになる。両者の票を足しても一〇〇パーセントにならないのは無効投票があったからであるが、その数が今回の選挙では過去最高の一〇四九八票に達していたことも話題となった。そのことについて「実は信任されたのではなくて、消極的に当選しただけであって、完全に信任したわけではない」と分析する識者もいた。

前回選挙の結果と比較してみると、郡氏は前回の一六五四五二票から一二六・五パーセント増となったのに対して、加納氏は敗れたとは言え、前回の八九二四票から実に四三二・二パーセント増である。その辺りからも、確かに積極支持層がそれほど多くなかったのではないかと類推することは可能であろう。

## 候補者は仙台を語ったが

与野党対決となった前回市長選挙は、投票率にも現れているように大いに盛り上がったが、その中であまりにも仙台のことが語られなさすぎた。とにかく国政が是か非かという話ばかりが先行しすぎる状況だったので、私は自分のｆａｃｅｂｏｏｋで、「国政に吹いている追い風・逆風を、仙台市長選に結び付けてどうこうしようというのは戦略的にはありなのだろうが、個人的に候補者から聴きたいのは全くそういうことではない。仙台を今後どうしていきたいのか、東北のために仙台ができることはどんなことだと考えているのか、それこそを聴きたい。東京での争い事は東京の中だけでやっておいていただきたい。今後の4年を託す人を選ぶ際に、仙台でそのゴタゴタの続きをやられるのは大変迷惑だし、邪魔だ」と苦言を呈した。

そのようなわけで仙台そっちのけで盛り上がっていた前回選挙に比べて、今回はそうした与野党対決もなかった分、仙台のこれからについて論戦が行われていたか、と言えば、それは行われていたと言ってよいと思う。

候補者二人はそれぞれ公約を掲げ、その中で仙台のこれからについて語っていた。それらを見てみると、まず郡氏の「チャレンジ一〇『新たな杜の都』」は、次の一〇項目からなる。

一、新型コロナを克服する。
二、子どもたちを守る。
三、社会的孤立を防ぐ。
四、子育てを応援。
五、可能性を開く。
六、ワクワクする街づくり。
七、デジタル化が未来の入口。
八、防災環境都市を目指す。
九、歴史と文化を育む。
一〇、市役所意識改革。

加納氏の「みよ（三・四）の約束」は、次の七項目である。

一、宿題のいらない教育を実現し、学校内の教育格差をなくします。
二、学校に民間活力を導入し、勉強、運動、地域活動にまたがった面白い教育を実践します。
三、ひとり親家庭への支援を充実します。
四、地場産業の活気を取り戻し、老舗ブランドを再構築します。
五、医療福祉サービスの質と量の向上を進めます。
六、スーパーシティ構想を推進し、コロナに打ち克ちます。
七、杜の都の芸術文化の拠点を整備します。

それぞれ、仙台の中で課題と考えていることの解決について公約として打ち出していることが分かる。それはそれでもちろん大事なことなのだが、私はこの二人の公約を見てかなり物足りなさを感じた。それは、どちらの公約にも東北に関する視点がものの見事に見当たらなかったからである。前回と違って、確かに今回は仙台についての論戦はあった。しかし、広く東北全体を見渡した視点はついに最後まで見ることができなかった。そのことが返す返すも残念であった。

ちょっと掠っているものとしては、郡氏の「五、可能性を開く」の中にある「仙台の豊富な人材と東北連携のポテンシャルを活かします」というもので、これが両者の公約の中に登場する唯一の「東北」という言葉である。「仙台の」がどこに掛かるか不明なところもあるが、ともあれ、この文意は、「豊富な人材」と「東北連携のポテンシャル」を「活かす」ということに主眼がある。何に活かすかについては書いていないが、公約全体が仙台について書かれていることから考えて、これも恐らくは仙台の発展に活かす、ということなのだろう。しかし、これは私が望ましいと考える方向性とは真逆である。

仙台に「豊富な人材」と「東北連携のポテンシャル」があるとするならば、それを活かすべきなのは、仙台の発展などではなく東北全体の発展において、である。私から見ればこの、東北を意識した発信が両候補者から全くなかったのは、仙台のトップを選ぶ選挙ではありえないことである。

言うまでもなく、仙台は人口一〇九万人を擁する東北最大の都市である。その動向は同じ東北の他地域にも多かれ少なかれ影響を与えるものである。そのことに思いが至らず、内向きの話だけに終始するのでは、仙台のこれからを考える、という点でも十分ではない。仙台の内と外、両方に目配りして、初めて仙台の今後の姿が描かれると考えるべきである。

## 「あの人」の公約は

と、ここまで書いてきてふと思った。「あの人」は選挙の際に、どのような公約を掲げていたのだろうか、と。「あの人」とは、以前この連載でも紹介した福岡市長の高島宗一郎氏である。高島氏の前回選挙は二〇一八年であった。この選挙で高島氏は三選を果たした。今回の仙台市長選挙と同様、現職と新人の一騎打ちとなったこともあって、福岡市長選挙で過去最低の投票率となったが、特筆すべきはその過去最低の投票率にも関わらず、高島氏は福岡市長選挙で過去最多となる二八万五千票あまりを獲得して当選したのである。福岡市民の高島氏に対する支持の厚さが窺える。

この時の公約について調べてみたところ、高島氏は次の七項目を掲げていた。

一、アジアの「玄関口」として九州の成長に貢献。
二、地域ごとの多彩な個性を生かしたまちづくり。
三、規制緩和による創業や雇用の創出。
四、教育環境の向上や女性活躍促進。
五、誰もが安心して暮らせるユニバーサル都市の推進。
六、地域が絆で結ばれた安全で快適なまちづくり。
七、持続可能な行財政運営の推進。

さすがよく見えていると思った。公約の一番目に「九州の成長に貢献」を挙げている。福岡の成長を九州全体の成長につなげること、そのことが福岡にとっても大事なことだと高島氏はしっかり考えている。

宮城県の合計特殊出生率が東京都に次ぐ全国第二位の低さであるにも関わらず、仙台の人口がいまだに増加を続けているのは、東北の他の県から仙台への流入増のためである。それを、「本来東京に出ていく人を仙台に留めている」などと自画自賛していてはいけない。仙台に人が集まることによって、東北の他の県ではその分人口の減少に拍車が掛かっているのである。そうしたことに目を向けず、「一人勝ち」にあぐらをかき、「我が世の春」を謳歌し続けるのだとしたら、東北の他の自治体は仙台にそっぽを向いてしまうだろう。

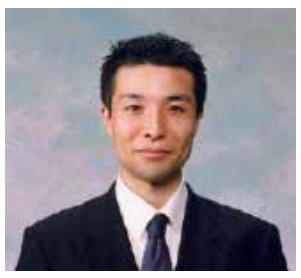
そうではなく、仙台に集まった人材を、人脈を、どのように東北全体の発展につなげていくか、仙台に集まる人の流れを仙台に留めず、仙台から東北の他の地域に人が流れる逆向きの人の流れをどうつくっていくかこそが、これからの仙台に問われることなのである。

その大事な展望が、今回の選挙では全く見えなかった。そのことが残念であった。仙台の中の課題の解決はもちろん大事である。だが、それは仙台だけで解決するというのではなく、同じ課題を多く抱える東北全体の中で共に解決を考えていく、そのための知恵を出し合う、という体制をつくっていくことが、今の仙台には必要なのである。

今からでも決して遅くないので、二期目を迎える郡氏にはぜひ、自ら「ライバル」視していると公言した福岡市を切り盛りする高島氏に倣って、東北全体を見渡す視野を持ってほしいものである。

## 執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/
Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

ハッチョウトンボ

石塔群と花

ショウキラン

シリーズ

## 遠野の自然

## 「遠野の立秋」

### 遠野 1000 景より

暦はいつの間にか立秋。東京にいると、コロナ禍の影響をもろに受けて季節を感じることができない。この連載記事を執筆するときにはじめて季節を感じるという具合である。

こうした状況に閉じ込められて早や一年半。精神的にも肉体的にも疲労感がどっさりと蓄積している。

そういえば、今年はセミの鳴き声もほんの少ししか聞いていない。カンカン照りの夏日も雨降りが続いてほとんどなかった。

ただ、小さな家の庭には「元気よく」雑草が成長している。二か月ほど前に刈り取ったばかりなのに。

やはり「バーチャル遠野」で夏を感じるしかない。

ヒマワリとリゾートあすなろ

夕暮れのヒマワリ畑

負傷したセミ

ツチアケビ

龍雲

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# 内向性と外向性を強烈に生かし始めた東北の事

先日、仙台の街なかで若い芸術家・S氏とバッタリ出喰わした。二〇一六年頃、JR仙台駅東口に大きな空き地ができた際、そこに一時芸術村を建てて活動していたアーティストの一人で、当地にビルが建った後も市内の美術館や公園を舞台に様々な企画を仕掛け、模索を続けているという。その話の中で、公園の遊具を子供たちによって色づけさせるという市の催しに参加した際に、色を塗る箇所や、使う色などを大人があらかじめ決めていたという事で、それじゃ子供らにやらせる意味がないじゃないか？と憤ったという経緯が印象に残ったのだった。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

近年、仙台をより魅力的な都市とすべく種々の試みが市中に施されてきているようだが、S氏によると公園の件のように確かに見聞きした感触はいい企画ながら、中身は肝心なところがズレている、つまりは相変わらず中央かどこかの影響でカッコばかりつけ、独自の信念に欠けていて、芯が通っていない事が多いというのである。その時私は思い当たる事として、全国的に有名な仙台のジャズストリートフェスティバルの、演奏場所・時間・演奏者の何もかも決定済みの上で進行する窮屈さについて語り、開催中に偶然見かけた、裏ぶれた飲み屋街の横丁でゲリラ的に演奏し、瞬時に退散していったバンドの方がよほどこの「祭」の本質を表していたと感じた事を振り返ったのである。

無論、公園の件も祭の件も、秩序が保たれる事が前提である事はわかる。だが、この街は少々秩序を重視する傾向が強すぎるのではないだろうか（音楽祭が有名な割りに近年全国に設置されているストリートピアノも仙台では見られない）。

子供の行為や、芸術など、無秩序や野放図を根幹とした分野まで、規則でがんじがらめにする事―それは、何かを守ろうとして、却って大切なものを失い兼ねないような気がしてならない。

ところで、かつては誰かと協力して何か企画を進めるような事を随分試みた筆者も、近年は基本的にそういう事が向いていないとわかって、こうして独り好きなテーマについて考え、書く格好が自分にちょうど良く感じる昨今である。長らくのコロナ禍においても孤独にかけてはほとんど苦痛を感じない内向性の強さにも困ったものだが、一方でその内向性が東北的にポジティブな側面として近年生かされている場面もあるように思える。本稿では、「内向的な東北」のイメージを代表してきたような岩手県で地道に積み上げられてきたある成果に着目しながら、本来無秩序・アナーキーな存在である芸術がいかに行政の思惑と付き合いながらも、人間の内向性をも救い得るか―などという事に想いを致してみたい。

＊

仙台やおそらく今や首都圏の大型書店でも入手できる『コミックいわて』という冊子がある。郷土関連の本棚にあるのだが、実はこの冊子、全編マンガである。

岩手県による「いわてマンガプロジェクト」という地域振興政策の下に二〇一一年から編集・出版されてきたもので、漫画好きな県知事・達増拓也氏責任編集という後ろ盾を掲げて第二段、第三段と巻を重ね、大きな話題となってきた本冊子も最近遂に第十巻に到達したという事である。

これまで、岩手県出身または在住・所縁の漫画家が参集して内容的にも岩手の生活・青春・歴史・芸能・農漁業・幻想・震災など、関連するあらゆるテーマが短編漫画という形で疑似体験され、広い分野や世代の人々の知識となるという、極めて有効的な地域事情広報ツール？としての役割を果たしてきた、と言えよう。

実のところ、岩手、東北に特別に出身漫画家が多いという訳ではないが、拙稿でも何度か触れている石ノ森章太郎や大友克洋といった巨人を輩出するお隣・宮城県に決して引けを取る事なく、当誌にも参加する岩手県の作家も池野恋や吉田戦車、地下沢中也など印象はやや地味ながら個性の強い面々が揃っている。

何故、地域振興政策にマンガなのか？無論、東北を彩る創作分野は漫画に限らず、少し前には全国的にも仙台や福岡といった地方都市に住むようになった小説家の存在が注目されたものだが、文字媒体では例え作家と作品を集めて一冊の本にしたところで、人々の目を引く事は難しい、と想像される。やはり絵や映像のインパクトの強さは侮れないし、漫画は映像よりも更に誰もがとっつきやすい、という強みがあると言えるだろう。

マンガ好きの県知事、というと一見奇異のようだが、昭和一桁生まれの私の父世代はともかく、現在の五十代六十代はマンガ黎明期の洗礼を受けた第一世代である。とはいえ、本当にその年齢になっても漫画を読み続けている人がどれだけいるのかは私も知らない。私自身の事を言えば、無論幼少から漫画を読んで育ったが、二十代三十代はむしろ映画狂として過ごして漫画はあまり読まず、四・五十代になった今になって一番、漫画を読むようになったと感じる。長時間拘束される映画を徐々に敬遠し始めた事も要因だが、漫画が一昔前よりも面白くなってきていると感じるのは、錯覚だろうか？拙稿でも度々漫画テーマを取り上げ紹介してきた青森県舞台の『ふらいんぐういっち』、北海道舞台の『ゴールデンカムイ』も未だ誌上連載中でますます面白く、その時代の先端を走っている印象はかつて娯楽の王様と呼ばれた映画を遥かに凌駕しているようにすら思えるのである。

本当に漫画が映画より面白くなっているとすれば、その理由として思い当たるのは、映画業界のオリジナル脚本の減少という現状だ。

日本の映画業界において、所謂撮影所システムが崩壊してはや半世紀、確かに映画の現場で俳優や裏方、そして脚本家を育てる仕組そのものは変化したが、脚本家自体が育っていないという訳ではない。ただ、脚本家がオリジナルの作品で勝負させてもらえる機会は激減している。現在、製作される商業映画には漫画を原作とした内容が非常に多い。

これは撮影所システムなき後、製作委員会方式となった映画に出資者が必要となった事に起因する。スポンサーの為に結果を出す必要があり、売れるかどうかわからぬ新人脚本家のオリジナルで博打を打つという冒険が難しくなった。結果、既に世に評価され人気のある漫画の映像化ならば、ある程度の収益が見込めるという訳で、「原作つき」は今や主流とも言える勢いだ。

これは日本だけでなく、数々のオリジナル脚本で世界を驚かせ続けてきた米ハリウッドでも同傾向なのであり、どこの国でも無から何かを生み出す野心に賭ける余裕がなくなっているという事なのかも知れない。

かつて、戦後の漫画黎明期には、若く貧しい漫画家たちが、劇場で映画を観ながらその驚きを作品に取り入れ、それまで誰も目にした事もない数々の漫画を生み出していった。しかし現在では本来なら映画の脚本家を目指したかも知れない人材までも漫画やアニメーションの世界へなだれ込み、今や実写映画が完全に漫画やアニメの勢いの下に追従するかのような印象すらある（脚本は文章の世界なので小説に転向するようにも思えるが、脚本家は基本的に映像を求めるのである）。

二〇一九年には英国・大英博物館で日本のマンガ展が大々的に開催されるなど、長く子供の読み物とされ、しばしば多くの場で軽蔑され禁じられながらも、いつの時代からかすっかり市民権を得たかに見える漫画であるが、これは漫画を生む根本的な土壌とも言える内向的思考、妄想的観念などネガティブに捉えられてきた人間の内向性の肯定でもあるように思われる。

『コミックいわて』が注目された理由の一つに、そのような所謂先進的な、ユニークな試みのイメージから遠かった事があると思うのだが、では岩手県はひと昔前と比べ何か変わったところがあるのだろうか。

『東北六魂祭』のような東北他県同士の交流は、その後の東北に少なからぬ変化をもたらしたのではないかと思われるが、この『コミックいわて』の始まりは六魂祭より、更にはかの震災より以前であった。先進的な事、ユニークな事から岩手が遠かったかといえば、鬼剣舞・鹿踊りなどの芸能、中世平泉の思想、喫茶店やパンの文化・・その斬新さと尽きぬ魅力は今更本誌面で語るのもくどいほどだ。

「アピール下手」と言われてきた岩手県がようやくその魅力の全てを凝縮し内外へ発信できる媒体として、マンガを認識した―つまり、岩手は変わってなどいない、ただ、待っていた、探していただけなのかも知れない。

かの岡本太郎は言った。

「英雄とか大きな仕事をした人は皆、内向性と外向性を強烈に生かしている」と。

岩手県を代表とする東北が、強烈な内向性を宿している事は確かであろう。内向性の可能性は、独自に内省する事で成される、その哲学や芸術の熟成にある。

その意味では、冒頭に挙げた公園や祭での件を鑑みると、仙台などは外向性がやや先行・優先されて内向性が軽視され浅薄になっているという事が考えられなくもない。外面のカッコばかりではなく、内向性のカッコよさももっと認めた上で、都市化する東北がよりふさわしい発展に導かれる事を願うばかりである。

＊

前述の大英博物館でのマンガ展では、結局ミュージアムの大空間と漫画本来の小空間が溶け込まず、人々は最終的に博物館内にも関わらず小冊子の漫画を黙々と読み耽っていたという。

コミックいわて＋（テン）
2021年　岩手県

漫画を原作とする映画の多くは、漫画と実写の間に生まれる違和感を払拭できず、作品的に失敗する。いかに市民権を得ようと、漫画自身はその小空間の超越を拒み続けるかのようだ。

『コミックいわて』に参集した漫画作品たちもまた、地域振興政策という行政の意図の下で一見行儀良く、窮屈そうに誌面に並んでいるように見える。だが例えば一関在住の飛鳥あるとによる作品のように、東日本大震災の傷が癒えぬ中でのコロナ禍の出来事など現代東北の問題の核に迫ろうとする試みがあり、そこには東北の内向性を最大限に表現し得る漫画という媒体への絶大なる信頼と野心とを感じる事ができるのである。

行政や外部の思惑に翻弄されるかのように見え、実は頑ななまでの強烈な内向性で世界中の人々を虜にしてゆくマンガという小空間。

それが、東北という大空間をいかに揺るがすのか―その鍵は、描く者と接する者の外向性が握っている。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

# シリーズ【東北の郷土芸能】第 4 回
# 【大乗神楽(だいじょうかぐら)】について
## 旧和賀郡内に伝わる祈祷色の濃い神楽

大乗神楽との最初の出会いは、岩手県北上市の村崎野大乗神楽だった。それまでは大乗神楽のことはまったく知らなかった。

知人に勧められて見て、その迫力と厳粛な雰囲気にすっかり魅せられて、ファンになった。

祈祷色の濃い神楽ということで、舞台上の結界、手印、山伏装束、そして怖そうな面など、どれをとっても祈祷の世界にずるずると引き込まれるようで、ただただ圧倒された。

特に面。その中でも「荒神」の面にはいまでも引きつけられている。

和賀大乗神楽の「荒神」は真っ赤な面。村崎野大乗神楽の「荒神」は三つ目。「異界」から登場したような面である。

＊

このような出会いがあって、さらにその出会いを劇的にしたことがあった。

筆者の郷里の宮城県涌谷町に箟峯寺という古い寺がある。そこには、いまはないがかつて存在した神楽があって、消滅後に「村崎野大乗神楽」に継承されたという話を耳にした。

その真偽のほどは確認していないが、何らかのご縁があることは確かなようだ。

最初はそうしたことを知らずに接触したが、この「ご縁」でさらに強い絆が生まれたと感じた。

その後も村崎野大乗神楽の舞台は何度も拝見した。

ついには、その中のすばらしい舞手の方にもご挨拶するまでになった。

さらに「ご縁」は続き、前述の筆者の郷里のお祭りにも来ていただいた。

その際には、箟峯寺の住職も来ていただくことが出来、双方を紹介でき、古い因縁の橋渡しができたというおまけまでついた。

「ご縁」とはまことに不思議なものである。

神楽幕

荒神・・・村崎野大乗神楽

荒神・・・和賀大乗神楽

**①【大乗神楽とその位置づけ】**

**大乗神楽は、元は 600 年前に創始された貴徳院法印神楽とされ、修験山伏の手で伝承されていた獅子神楽の一つで、山伏神楽と分類されたこともあるが、山伏神楽以上に祈祷色の濃い神楽であり、特に、手次（手の振り付け）や踏み足、九字（加持祈祷するときの九つの手の結び方）など修験の呪法の残る祈祷色が濃い神楽である。主に北上・花巻地方に伝承されている。同じ山伏神楽の早池峰神楽とは、演目の名称も舞い方も全く異なり、早池峰神楽が神道色の強い「動」の神楽とすれば、大乗神楽はゆるやかな所作の仏の教えを伝えようとする「静」の神楽ともいえる。また、信仰対象も「天照大神」を最高神とする早池峰神楽に対し、大乗神楽では「大日如来」が最高の仏様として崇拝される。**

**②【和賀の大乗神楽】**

**現在、旧和賀郡内で神楽幕を張って大乗神楽を演じているのは、昭和 49 年に県指定文化財に指定されている和賀大乗神楽（北上市和賀町煤孫）、村崎野大乗神楽（同市村崎野）、宿大乗神楽（同市二子町）、上宿和賀神楽（同市二子町）、笹間大乗神楽（花巻市北笹間）である。**

**③【大乗神楽の本来の舞台】**

**本来は舞台飾りも厳密で、舞台の四隅に忌竹を立て、一方に天神宮をまつり、鬼門（東北）と裏門（南西）との隅に釜をすえて支柱を立て、太いシメナワを張ったという。**

**④【大乗神楽の演目】**

**演目は「舞曲」と「狂言」に区分され、「舞曲」は、「七ツ釜」、「庭静【にわしずめ】」、「魔王【まおう】」、「荒神【こうじん】」、「権現【ごんげん】」などのほか、「鐘巻【かねまき】」、「蕨折【わらびおり】」、「岩戸開【いわとびらき】」など数多くのものを伝え、さらに「三番叟」など 33 種目、狂言は「宝狂言」、「つぼ草」、「寺渡し」、「三人婿」など多数。本地垂迹説をもととし、本地仏が語られる。**

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.